

希望の残滓

井上稜麻

1

十月二日、曜日は知らない。

かつては咲野公園と呼ばれていた高台にて。

天気は曇り、いつも通りだ。

鉛色に染め上げられた空の陰鬱さと晴れぬ気持ちとが交雑し、今日も心は沈んでいる。自慰することすらも諦めてしまっただけは、日毎により深くへと沈んでいくようだ。それも仕方ないことだ、と思い始めたのはもう随分と前のことになるだろうか。

自分は今、見晴らしの良い、海に見える高台に居る。正確には、海しか見えない場所であるが。

以前はあらゆる物が混在し、流通し、消費されていた街があったのだが、今はもう跡形も無い。そこに住んでいた、溢れんばかりの人々も同じく。

しかも、見えている海も海でありながら青くはない。何とも矛盾した光景である。

それら、遺憾ながらも現実として顕現する光景は、何より目を背けたいものではあるが、正しく、偽りない描写を以ってして記しておこうと思う。

この光景もまた、私の足跡に他ならないのだから。

「ここにいたんだ」



筆を走らせていると、不意に背後から声が聞こえた。

自前の汚濁しきった景色には不釣り合いな、これ以上なく澄んだ声だった。心地よく耳奥に響く、ともすれば安心すらもたらしてくれる、それほどに澄んだ声だ。

だが自分はその声に振り返りもせず、また返事もしなかった。理由としては、日記を書くのに忙しかったということと、今は誰かと話したい気分ではなかったということが主だ。

声の主はそんな自分に構わず続けた。

「もうじきここもダメになりそうだから、移動の準備をして」

その言葉に、自分はわざとらしいため息で応える。

「どうしたの、なにか懸念点でもあるの？ あるなら言っ
て、どんなことでも言わないよりはマシだから」

懸念点はさて置き、不満点ならどれだけでも挙げられるのだ
が。当然、そんな愚痴は口から出さずに飲み下す。

気分は乗らなかったが、だからといって彼女を無視し続ける
わけにもいかなかった自分は、言葉少なめに、目立って死活問
題になるだろうと思われる事について問うた。

「……ここを離れて、何処に行くんだ」

もはやこの地球には、絶対の安全も、永久の安寧も存在しな
い。

けれど、もう留まって五日になるここは、今までに住処にし
てきた中で最も安全な場所だった。

ここを離れたとして、ここ以上に良い環境の揃った場所を確保できるのかどうか。

できたとして、そこに一日として留まれるのかどうか。

それは、懸念と言えば懸念だったのかもしれない。

「どういう意味なの？」

「簡単。ここ以上に、或いはここと同等に安全な場所に辿り着けるのか、と訊いたんだ」

「確信なんてどこにもないよ、当然でしょ。……うん、ここには類を見ないほど快適な環境が揃っていたよ。いいや、今だっ
て揃ってる、それだけは確かだよ。だけど、今日中にここを離れないと、私たちは死んでしまう。快適かどうかを問う前に、
ここに居たら私たちは生きられないの」

やはりそうきたか。

薄々勘付いていた、というより、彼女の言からだいたい予想はできていたが。

しかし、そうは言っても……。

「じゃあ、何処へ行くんだ」

……離れなければいけないとして、辿り着いた先で生きられるのかどうか。

辿り着いた先は、もはや人類など踏み入ることさえできない地獄かもしれない。

ならば、ここに留まって死ぬのと、どこぞに辿り着いて死ぬのに違いなどないだろう。むしろ、少しでも労力をかけずに死んだ方がマシだとも思える。

「先見性があるのは君のいいところだね。だけど、それも最近
は臆病さに姿を変えているみたいだ」

「なにが言いたいんだ」

「それこそ簡単……ここを離れないと死ぬの。生きているのな
ら後のことなんてどうにもなるけど、死んでしまったらそうは
行かない。君はそれを分かって口を利いているの？」

唐突に、背後から掛けられる声に冷静さが籠もる。よほど自
分の受け答えが気に入らなかつたと見える。

これまでも今回に似たやり取りをした憶えはあるが、今の
は過去最高にキツイ声色だった。

彼女も、もう飽き飽きと言った風だ。

「分かった、もう言わないでくれ。移動の準備をするよ」

言って、自分は煤と灰で汚れたベンチから立ち上がる。

そうは言うものの、強いてまとめる物を挙げるなら、それは
少ない野営用の道具と同じく少ない食料だけだ。

自分がやらなくとも、彼女一人ですべてできただろうに。

内心で愚痴を溢しながらも、自分は彼女が先立って行ってい
た荷造りを手伝い始めた。

→

ほんの数ヶ月前の或る日のこと。

地球上の文明は、唐突に終焉を迎えた。

揺り籠としていた大地は大きく裂け落ちた。

子守唄としていた潮騒は、高々と襲い掛かる壁と化した。

そして心の拠り所としていた蒼穹は、物の見事にかつてのものとは変わってしまった。

終焉が訪れた日、あらゆる電波を通して私たちの耳に届けられた声がある。

私たち人類は罪を重ね過ぎました。もう生きていても得はないでしょうから、今日で人類の歴史は終わりにしましょう。”

それは如何なる境遇の、如何なる素性の者が放った言葉であったのか。

明日を生きることさえ確かではなくなった今となっては、もはや知りようがなく、また知りたいとも思わない。

そうした末に残ったものと言えば、休むことを忘れた火山に地面、暴力じみたなにかを降らせ続ける雲に、高い壁となって襲い掛かってくる海くらいである。

……いや、あともう一つ。

もう一つだけ、忘れてはならないものがある。

それは、滅びを迎えたこの世界で、未だ死に切れない私たち人類である。

「相当歩いたみたいだから、ここで少し休憩しよう」

そう言うと、彼女は背負っていた荷物を降ろし、その中から飲料水の入ったペットボトルを取り出した。

「地図をくれ。相当歩いたと言ったよな……それにしても、そんなに移動したようには思えないぞ。今、ここだよな？」

移動した道程を地図上でなぞり、今いる地点を指差し言うと、彼女はうん、と簡素に答えた。

「相当歩いた、っていうのは距離的な意味じゃなく、君の疲労を考慮しての言葉。それとも、疲れているように見えたのは私の見間違いだった？」

「ん、俺のことか？ いや、確かに疲れはしたが、歩けないままに疲れてはいない。心配してくれるのは嬉しいが、早くに離れた方がいいんじゃないのか？」

「うん、確かに行動は早い方がいいよ。でも、動けなくなるまでに疲労を溜めてしまったらそこでお終いでしょ？ そうなるより先に小まめに休憩を取る方が、長距離の移動には適している」

専門家を思わせる口調で一通り言い終えると、彼女はペットボトルに目をつけた。

彼女の艶のある唇の間を水が流れていくのを眺めながら、自分には素朴な疑問を投げる。

「あんた、そっち系のことに詳しいのか？」

「そっち系……？」

ペットボトルを口から放すと、彼女は要領を得ない様子で問

いを投げ返した。

「だから、サバイバル系の知識ってことさ。大学では登山でもやっていたのか？」

「ううん、やってない。君の言う『サバイバル』系に興味があるのはそうだけど、本格的にやったことはないよ」

「興味だけでそんなに専門家染みたことを言えるのなら上等だな。教授なんかの才能でもあるんじゃないかと、そう言えば、大学で学んでいたのは地学とか言ってたか」

問い掛ける、というよりは独り言のように吐かれた自分の言葉に、彼女はささやかに微笑んで答える。

「そうだよ。大学院まで行って、火山学や地震学、気象学まで学んだの。今となっては、この道を選んだ過去の自分に感謝するばかりだな」

「だろ。まるで世界がこうなることが分かってたかのような選択だ。じゃあ、あの場所を離れなきゃいけなかったって言うのも、地学の知識で？」

「そう。近くに大きな活火山があったでしょう？ あれの活動周期を一人で調べておいたの。それこそ、大学で得た知識と文明の利器を使ってね」

自慢げに言うと、彼女は地面に下ろしたりユックサックの中から何やら工具のようなものを数個取り出した。

「とある変わり者の博士がいてね、その人は根っからのアナクロ人間だったの。作業のほぼ九割が自動化されているこの世の中で、彼は動作の八割を人力に任せる計測器ばかりを開発して

たんだ。曰く、私たち人類は己が肉体の有効な活用法を見失ってはならない、ってね。感謝していると云えば、彼にも感謝するばかりかな」

彼女がリュックサックから取り出した幾つかの機器が、そのとある博士の開発したものなのだろう。自分の目にはそのどれもが同じものにしか見えなかったが、きっとそんなことはないだろう。

「驚いたな……素人臭くて悪いんだが、計測機器ってそんなに小型化が進んでたのか？ しかも、動作の八割を人力で？」

「本当に疎いんだね。二〇三〇年ともなればこんなのお手物」

彼女は胸を張って自慢げにそう言い、見せてくれた計測機器の数々をリュックサックへと戻し始めた。自分はどうと、急いでノートとペンを取り出して、そんな彼女の仕草を克明に記していく。

「……両親の反対を押し切って大学へ行って、正解だったな」

ふと、そんな言葉が緩やかに自分の耳へと届いた。

ノートへと落としていた目線を上げると、そこにはこちらに背中を向けたままの彼女が居る。その背中から、自分は何故か、愁いを感じ取った。

「反対、したのか……？」

言葉が続けなかった彼女へと、こちらから問い掛ける。

「うん。両親はどっちも新聞社に勤めて欲しかったみたい。勝手だよ、すぐく勝手」

「そう、かもな……」

自分は掛けるべき言葉が見当たらず、少し曖昧に答えた。

「……君は、大学で何を学んでたの？」

彼女は不意に思いついたように……気を紛らわすように……訊ねる。

思えば、彼女と出会ってもう一週間に届こうとしているのに、互いの素性を語り合う機会はほとんどなかったものだ。彼女について知っていることと言えば、名前と、おおよその年齢と、大学生であることと、どこに住んでいたかということぐらいだった。

第三者から見れば、よくこんな関係で二週間も行動を共にしていたものだ、と思われることだろう。自分も我が事ながら、信頼を置くには互いを知らなさ過ぎると、そう思うほどだ。しかし、少し考えを巡らせてみれば、理由は極めて単純だった。

単に、出会った当時は互いに余裕がなかっただけだ。世界が崩壊し、親しい隣人が死に、明日を生きられるのかさえ分からない状況で、そこにあつた唯一の希望にすがるしかなかった。

それが矮小ながらも確かに希望である限り、その年齢や素性などどうでもよかつたのだ。

ただ、一緒に居られる誰かであるのなら、どうでも。

「俺は、なんてことのない大学の文学部で学んだ。小さい頃から夢があつてな」

「夢？」

「ああ。俺は、作家になりたかったんだ。もつと言うと、真実を伝える仕事をしたかった。だから元を辿れば、以前は新聞社か、テレビ局にでも勤めようと考えてたんだ。けど、賢くなるにつれて次第に現実が見えてきてな……俺は、大人数で一つの物を造り上げるっていう作業が不得手だったんだ」

語っている内に、心の内には自嘲的な感情が渦巻き始める。

「そうやって、賢くなつては一つ諦めて、また一つ諦めて、を繰り返していたらいつの間にか選択肢は極端に減っていてな。結局のところ、目指すところは作家に落ち着いていたんだ。まあ、不幸中の幸いで、落ち着いたのは大学受験の前だったんだ。な、大学は創作について学べるところが選べたんだ。ある意味妥協の末のことだから、胸を張って語れることでもないんだけどな」

「そんなことないよ。どんなものを目指したとしても、そこを目指そうとした強い意志だけは本物でしょ？　それが本当なら、結果なんて大したことじゃない」

少しズレているように思える慰めの声をかける彼女は、その顔に柔らかい笑みを浮かべていた。そんな彼女に、自分も笑顔を作って答える。

「だから、と言ったらおかしいのかもしれないけど、あなたの両親は羨ましいな。俺には到底届きそうにない新聞社勤めだったなんて」

「生まれてくる家庭を間違えたかもね」
「かもな」

互いに言って、二人して声を上げて笑った。
気持ちが好いほどの笑い声は、やはり気持ちが好いほどに山々の間に木霊していた。

：

「俺が大学で学んだ知識の使いどころは……これだな」

一頻り笑い終えて落ち着いたところで、自分はそう言っただけ物の中から日記を付けているノートを取り出した。

「あ、それ日記だよな？ 前から付けているのには気付いてたけど、いつからなの？」

「世界がこうなった初日から、って言えば分かるよな？ つまみり数ヶ月前ぐらいからになるか」

「大雑把なんだね。日付は書いてないの？ 書いてるのなら、初日の日付を見て確認すればいいでしょ？」

「書いてはいるんだが、初日の日記はもう手元には無いんだ」

平然とそう返すと、彼女は心底から訝しむように眉をひそめた。そして、しばらく自分の言の真意を探っているようだったが、遂に答えには至れなかったか、

「どういう意味……？」

などと、懸念を孕んだ声で問うのだった。

「日記は、一週間ごとに捨てて……いや、目立つ場所に置いてきてるんだ。毎週の始めにどこから来たのかを、終わりにどこへ行くのかを書いてな。こうして置いていけば、もしも俺以外

に生き残っている誰かが居たとしたら、これを読んで俺を追いかけてくれるかもしれない、そう思ってな」

「なるほど。それ、見てもいいかな？」

遠慮気味に言う彼女へと、自分は特に何も思うことなくノートを渡す。

手に取ったノートを開いてすぐに、彼女は問う。

「これ、英語でも書いてるんだ？」

「書いてるのは日付とどこから来たのか、どこへ行くのかというところだけだ。できることなら全文英語で書きたいのだが、英語が苦手だな」

「文系なの？」

彼女はイタズラっぽく微笑んで言った。

そうして、再びノートへと日線を落とすと、改めて疑問に思ったらしいことを問う。

「でも、ならなんで中途半端に英語を使ってるの？」

「ちよっと前から、この国も条件付きで移民の受け入れを認めただろ？ それを機に世界中の人間が多く流れてきただろうから、必要最低限のことだけでも、俗に言うグローバルスタンダードな英語で書いておこうと思ったんだ」

淡々と説明すると、彼女は再びなるほど、と呟いた。パラパラとノートをめくって今週分の日記を読んだらしい彼女は、ノートを優しく自分へと返した。

「君は真実を伝える仕事を諦めなかったんだね。だから、こうやって真実の日々を書き綴っている。やっぱり立派だよ」

短く吐かれたその言葉、その声は、感じたことのない色を帯びていた。そこに嘘偽りは見えず、彼女は本心から自分を褒めてくれているようだった。

少なくとも、自分にはそう思えた。

「そう、なのかも……でも、違うな」

彼女は自分の行いを立派だと言ってくれた。その言葉で多少は気が晴れるような、爽快感を感じた。

だが、それがどんなに救いとなる言葉であったとしても。

それが、自分の存在意義を示してくれるものだったとしても。

——決して、そんな甘えを許してはいけないのだと、自分の弱さ知る他でもない自分が、そう言っていた。

「これは、道標なんだと思う。言っただろ、週の始めにどこから来たのかを書いてるって。つまりは、これを先週、先々週、さらにその前まで遡っていけば、いずれは自分の家に辿り着けるんだよ。いつでも帰り道を見失わないように、こうやって日記を付けてるんだ。ただの未練だ——まったく、女々しいっただらありやしない」

知らず、自分は両手で目を覆って独りごちていた。そうやって目前の世界から、見たくもない現実から目を背け、逃げたのだ。

何も言わず、吐息だけを虚空に溶かしていた彼女は、一体何を思っただろうか。

失望したか、呆れたか。

「——まるで、ヘンゼルとグレーテルだ」

彼女は静かに言った。

誰に言うのでもなく、ただ吐かれただけののように聞こえた言葉。

その言葉に込められた彼女の感慨が何であったのかは、未だに解らないままだ。

2

稜線を越えると、眼前には大きな街が広がった。

街の俯瞰風景を眺めながら、自分は呆気に取られざるを得なかった。なぜなら、見下ろす街が今までに見てきた中で最も原形を留めたものだったからだ。かつて高節と呼ばれていたそこには、幾つかの建物が誇らしげにそびえ立っていたのだ。

「建物がある……流石は、次期首都候補に挙がっていた都市だね」

冷静に言っただけのけたように聞こえた彼女の声は、その実、興奮からか少々上ずっていた。

この時、自分と彼女の心は一つだっただろう。彼女の胸の内にも、自分と同じくもしかしたら、から始まる数々の前向きな想像が生まれたに違いない。

もしかしたら……誰か、自分たちの他に生き残った者が居るかもしれない。

何か、明日を生きる助けとなる物があるかもしれない。

どこか、自分たちに安心を与えてくれる場所が存在している

のかもしれない。

——止め処なく溢れてくる想像、妄想。

今確かに、自分の心が浮かれているのが分かる。

希望も未来も、あらゆるものが皆無である現実には、微かに光が差している。

自分は、彼女と一緒に光の差す方向へ向かって歩み始めた。

∴

彼女の提案によって、自分たちはまずは街の中学校へと向かってみることにした。

避難所になっているとしたらここだ、という彼女の憶測に基いての行動だった。

そうして赴いた中学校にて、始めにこの足で踏んだ校庭には、幾つもの裂け目が走っていた。中でも大きいものは、人一人なら容易に落ちてしまえるだろうものだった。

「予想してはいたけど、それにしても酷い……」

校庭の状況を見回した彼女が、気後れした声で呟いた。しかし、彼女はすぐさまその視線を校庭から校舎、体育館へと移した。そしてそれは、希望に満ちた輝く視線となっていた。

彼女も、今は辛いことよりも、心の弾むことに意識を向けることにしたのだろう。

「分かれて探索しよう」

彼女は自分へと振り返ると、僅かに高揚した表情でそう言っ

た。

逸る気持ちがそうさせるのか、彼女の提案はどこか性急に感じられた。

「私は体育館を調べてみるから、君は校舎の方をお願い」

「そっちの方が楽しそうだな。生存者も居れば物資もありそうだ」

「そうだね……でも、校舎にも誰か居るかもしれないから、手抜きはないようにね」

「ああ、分かってる。嬉しすぎて、見つけた矢先に誰彼構わず抱きついちゃうかもだ」

「それはいいね。じゃあ、三十分後にまたここに集合しよう」

言いながら、彼女は電波が飛ばなくなったことによつて、もはやタイマーとしてしか機能しなくなった腕時計で三十分を計り始める。そんな彼女に倣つて、自分も左手首に巻いた腕時計を操作する。

三十分。それだけあれば、目前にしている校舎のほとんどは見回れるだろう。なにしろ、校舎と言つても中学校の校舎だ。大ききなどタカが知れている。

「三十分後、だな。よし、じゃあ分かれよう」

「うん、気をつけてね」

彼女の言葉にそっちもな、と返して四階建ての校舎へと足を向ける。外壁の所々に亀裂を走らせながらも、校舎は確かに建造物としての原形を留めていた。

これまで見てきた、今にも瓦解しそうな、或いはもうしてし

まったものとは訳が違う。見ているだけで安堵するほどの健全さを以ってして、悠然とそこに建っているのだ。

次期首都候補に選ばれた都市の中学校であるが故なのだろうその頑強さに、自分は素直に驚きながら感謝した。

威風堂々と踏み入った校舎の内観は、外観と同じくほとんど完璧に原形を留めていた。

昇降口から左右に長く伸びる廊下へと出て、首を横に振って視線を泳がせると、右には職員室、左には体育館まで伸びている渡り廊下があった。どうやら、教室があるのは二階かららしい。

職員室の前を悠々と歩き、中に何もなく、また誰も居ないことを確認して素通りし、階段へと向かう。

二階に上がり左右を見やると、それぞれの教室の出入り口である扉の上に吊り下げられたプレートに、クラスと担任教師の名前とが記されていた。

それによると、どうやらこの階には三年生の教室があるらしいことが分かった。

「っ……ここ、は」

一瞬、頭を揺さぶられるような目眩に襲われ、自分は思わずたたたらを踏んでしまい、廊下の壁にもたれかかる。不意に荒れ始めた呼吸を整える為に目を瞑って、ゆっくりとリズムを取る。

「どうして……」

己へと向けた問いは短く、そして静かに長い廊下へと消え入った。

しばらくして息が整い、目眩が治まったのを確認して、改めて三年生の教室が並ぶ廊下へ意識を向ける。

教室は階段を中心として、左に一組から三組、右に四組から六組までがあった。

まずは、階段の踊り場から廊下を左折する。

三組、二組、一組と、三つの教室の前を通りながら中を確認していく。大きくあてがわれた窓から自然の光が差し込むそこは……。

「……ああ、そうか」

分かってはいた……分かってはいたが、その光景は存外に胸を突くものだった。

目を覆いたくなる惨状。

覆ることのない現状。

眼前に立ちほだかる確かな現実が、自分が孤立していることをより鮮明にさせる。

本来なら多くの生徒が集い、思いを馳せる教室は、これ以上ないほどに崩壊していた。

木製の机や椅子は脚を折り、原形を留めず、窓を突き破り……とても、正視できるものではなかった。

「あ……」

はっとして横に振り向く。

視界の端、そのギリギリに何かが映った。

刹那に捉えたそれは、小さな人形だったようだ。

影は自分と目を合わせたかと思うと、すぐさま踵を返して走り去って行った。

自分は姿の不確かな影を追うべく、素早く、足早に廊下の突き当たりにある階段へと向かった。

階段へと辿り着くと、影がそれを上へ上へと上がっていくのを捉えた。

無論、追うべく階段を駆け上がる。危うく踏み外し、落ちそうになりながらも、懸命に駆けた。

二階分の階段を上がった先、一年生の教室が並ぶ廊下へと躍り出ると、見やった右方向に、件の影は居た。

小さく、中学生ぐらいだろう影へと、自分は妙におぼつかない足取りで歩き出す。

「きみ、は——」

上手く発声できない。何かが、喉に詰まっているかのように。それでも、歩む足を止めはしなかった。

啞然と口を開いたままに、影へと、もはや走り始める。

長い廊下は疾駆により一瞬で終わりを迎え、

「きみは……！」

走り寄った影へと触れようと手を伸ばした……刹那。自分の手は何も掴むことなく空を切った。

それこそ啞然として、自分は確かに影へと触れられた筈の手を見やった。

少しだけ汚れが目立つだけの、他に何も無い掌。

今度はそれで顔面を覆い、目頭が熱くなるのを感じた。

「……誰、なんだ……どこ、なんだ……」

ここは、とそう付け足して横へと目線を流した自分は、代わり映えしない筈の一つの教室を見付け、そして得心した。



「三十分後、だな。よし、じゃあ分かれよう」

「うん、気をつけてね」

「そっちな」

その言葉を最後に校舎へと向かって行く彼を見送って、私も意識を切り替えて自分の役割と向かい合う。

足に向け、目線を投げた先の体育館は、一見すると全く外傷がなく、私の心には今一度希望の炎が燃え上がった。

もしかしたら……もう止め処ない妄想が矢継ぎ早に浮かんでくる。

誰かの笑顔。

美味しい食事。

温かい寝床。

当たり前だった、けれど失われて久しいもの。それらがこの先にあるのだと、そう考えただけで宙に浮くような感覚になる。

自然と軽くなった足取りで、私は体育館へと向かった。地面の所々に走っている亀裂を軽く飛び越えながら、大きく開けた体育館の入り口まで辿り着く。

これまた自然とほころんでしまった口元を誰が見ているという訳でもないのに隠して、私は体育館へと入って行った。

「……………」

ワックスで光沢を帯びた床を踏み、中を見たことにより、私は息を呑んだ。

わざわざ手で抑えようとしなくても、笑みは自然と消えた。私は口元に当てていた手を下ろして、唇を嘯みながらゆつくりと歩み始める。

劣悪な足元事情をなんとか乗り切って、奥にあるステージの前まで行き、

「よいしょ」

沈む自分を鼓舞するために、わざとらしい声を上げてステージにより登る。

登り、体育館に踏み入った時から遠目に見えていた段ボール箱を前にする。恐る恐る中身を確認すると、そこには相当量の保存食が納まっていた。その中の一つを一度手に取り、そして戻す。

「……………はあ」

ため息と共に振り返り、体育館全体へと視線を巡らせた。

眼下を埋め尽くす瓦礫。その下から覗く、白骨化した手足。

つまるところ、この体育館にも生きている人間なんて居なかった。居るのは、死んでいる人間だけ。

自分でもどうかと思うほどの冷静さで、私は私なりに状況を把握した。

恐らく、ここは一時的に避難所として機能していたのだろう。それが数日なのか、数時間なのかは知らないが、首都化を見据えた都市建設によって命を救われた、数少ない住民がここに逃げ込んで来たに違いない。

人々はあらかじめ避難場所に指定されていたここに安心を求め、そして信頼を寄せたことだろう。しかしそれが、災いした。私は彼らの不幸を悼みながら、天を仰いだ。

そこに天井はなく、ただ私たち人類を嘲笑うかのような曇り空だけが覗いている。

「……………」

悔しさからか、悲しさからか、私は無意識に奥歯を強く噛んでいた。

圧死した人々の手が、足が、瓦礫の隙間から覗いている。そこから溢れてくる燃えるような苦悶の声を、私は静かに聞いた。耳を突き、心を焼くそれが、死んでいった人々の遺した無念さなのだ、私はそう感じ取った。

身を包む、恐怖、哀愁、悔恨。

押し潰されそうになりながら、それでもどうにか我を保って……でも、どうしても、泣き出してしまうかと思った。

強く感じた瞼——その隙間からは、けれど一粒たりとも涙が流れることはなかった。

そんなものは、とうの昔に既に枯れていたのだから。

私は詰められるだけの保存食をリュックサックに詰め込み、最後に心を落ち着かせるために、しばらくぼうっと時間を過ごした。

そうして、彼と決めた三十分の制限時間まであと五分となつたところで、私は校庭へと踵を返した。

体育館の中へは、もう二度と振り返らなかった。

「……まだ、なんだ」

彼と別れた校庭の真ん中まで舞い戻って、小声に呟いてみる。それからの五分間、私は十秒おきには腕時計を確認していたかもしれない。

そして、結局彼が約束の時間に現れなかった。

生真面目な性格の彼ならこんなはずはないのに、と思いつながら、なにかしらの事故にでも遭ったんじゃないかという心配を胸に、私は校舎へと歩み出した。



「ここにいたんだ」

彼は背後から掛けられた声に、無言で答えた。

崩壊した街を見下ろせる中学校校舎の屋上。そこで、彼は独り座り込んでいた。

彼女は彼と同じく校舎を一回りし（もっとも、その動機は彼を探すことだったが）、最後に残った屋上へと赴き、彼が無事

でいたことに安堵していたのだった。

「体育館で食料をたくさん見つけたの。またしばらく生きる道
ができたよ」

彼女は彼の背中へと朗らかな笑顔を投げながら言う。彼女に
は、背中を向けている彼は表情、目線を見取ることとはできない
が……表情は消え、目線は生気を帯びておらず、それは半ば死
者も同然の様相であった。

そんなこともいざ知らず、食料を得られたことに純粹に歓喜
する彼女の笑顔は、しかし、

「生存者は？」

彼の口から微かに漏れた言葉によって……風にさらわれても
おかしくはないほど小さな呟きによって……その一切を奪い去
られた。

「……誰も、いなかったよ。ただ、食料だけが残されてた」

残酷にも、事実は極めて平坦な声色を以ってして告げられた。

その声を聞いた彼はこれという反応を示すことなく、変わら
ず目線をどこか遠くへと向けていた。

「ねえ、校舎には誰か……」

居なかったのか、と問おうとして、彼女は言い切る前に口を
噤んだ。

そんなことは、彼に問わずとも知れていたのだ。現に、彼女
は校舎をその足で見て回り、もう見慣れてしまった惨状をここ
でも目の当たりにしたのだから。

誰も生きてはおらず、誰も生きてはならない惨状を。

「——思い出したんだ」

不意に、背を向けたままの彼から、彼女は耳をそばだてた。

「親父の転勤が決まって、そのあおりで俺が転校する前……俺は、ここに通ってた」

やはり無感情に吐かれたその言葉に、彼女は微かに息を呑み、眉をひそめた。

「ああ、思い出したんだ。出会ってすぐに別れを告げなければならなかった誰かを。俺のために悲しんでくれた誰かを。彼らと一緒にいた、あの小さな教室を——でも、もう駄目だった。もうここには何もなかった。思い出しても、戻っては来なかった。俺と一緒に大人になった筈のあいつらは、居なかったんだ」

彼の声には次第に涙が滲み始める。

彼女は、そんな彼に同情の念を抱かざるを得なかった。それは、その声が、彼女にとって初めて耳にする色を帯びていたからだだった。

彼が弱音を吐くことは頻りにあった。だが、今までのそれはあくまで気を和らげる、彼なりの息休めの方法だったのだ。それに比べて今の彼の声は、真に「弱音」であったのだ。

「……………」

彼女は何か気休めの言葉を探しあぐねたが、遂に最適な言葉を見つけるには至らなかった。

「……行こう。この校舎だって、いつ崩壊するか分からないから」

言って、彼女は座り込む彼へと歩み寄る。彼の精神の不安定さを思ってたか、彼女の歩みは控え目であった。

「俺は、行かない」

予想だにしていなかった言葉への驚きから、彼女の心は幾らかたじろいだ。

「え……どう、して？」

「……生きていく意味がない」

簡潔に、そして無情に、言葉は虚空へと消え人った。

「そんな、こと……」

彼女は何とも形容し難い感情を胸中に抱いた。

自身でさえその正体を掴み得ない不快感に苛まれた彼女は、けれどすぐさま我に返り、

「そんなこと、言わせない」

彼へと、感情を抑えた声で言っていた。

すると、一瞬のたじろぎがまるでなかったかのように、彼女は凛々しい表情と確かな足取りで、再び彼へと歩み寄った。

重く腰を下ろした彼の傍までやって来ると、彼の腕を掴み取っては、そのまま引っ張り上げようとする彼女。

「さあ、立って」

依然として感情を抑えた声は、まるで彼の耳には届いていないようだった。

そして、全身の力が抜け切った彼の、成人男性の平均に位置する体を持ち上げるには、彼女はあまりにも非力だった。

ほんの少しだけ持ち上がり、また落ちる彼の体。

それを見届けたが最後、

「立って……立ちなさい！」

彼女は、枷を解かれた感情に任せて激昂していた。

「私たちはまだ生きてるの！ なら精一杯に生きて、やれるだけのことをやって、それから死になさい！ 君は逃げてるだけだよ。辛いことから、嫌なことから」

「逃げて何が悪い！ 誰も彼もが死んだんだ、何もかもが滅びた……もう何も残っちゃいない！ こんな世界に取り残された俺たちに何ができるって言うんだ！」

彼女から伝播したのか、彼までもが抑え込まれていた感情を爆発させていた。それでも彼女へと振り向きはしないままに放たれたそれは、彼の、魂からの絶叫であった。

「みんな死んだ……それは私にとっても同じだよ。君だけじゃない、家族を、友だちを失ったのは」

「あんたが失ったのは、あんたの人生を勝手にしようとした身勝手な両親だろ……」

「違う！ いや、そうだよ！ 私の意志なんか全く考えてくれなかった、酷い両親だった！ それでも……それでも私を産んでくれたお母さんだった！ 育ててくれたお父さんだったんだよ！」

彼女の絶叫に彼ははっとした。

己が決して口にしてはならないことを口にしてしまったと気が付き、彼女が、今最も己に近い存在であると直覚したが故に。

「私だって、悲しい。当たり前だよ、そんなこと……」

彼女は小さく、声を震わせながら言った。しかし同時に、涙が滲んでいる様子はない声であった。

心からの悲哀を湛えた声と、それでも流されていない涙とが織り成す矛盾が、彼の意識をかえって明瞭にさせた。

「でも……うん、だからこそ。私たちには、やらなくちゃいけないことがある」

掴んでいた彼の腕をゆっくりと放すと、彼女は何かを思うようにそっと目を閉じ、静かに深い息を吸った。

「それ、は……」

言葉が続けなかった彼女に向かって、彼は問うように呟いた。暫時の後、彼女は言った。

それはとても穏やかで、

「……それは、語り伝えること」

まったく迷いのない言葉だった。

「私たちは伝えなくちゃいけない。決して遺伝情報には記録されないもの……言葉、物語、歌、文化、思いやり。長い時の中で築かれた、人類の愚かしい歴史——真実を伝え、同じ過ちを繰り返さないように戒める。悪しき過去を語り伝えることと、より良い未来を創ることは同じだから。そうすれば、世界は再生しないかもしれないけれど、私たちは前に進める……」

ふと、遠い空より紅い光が姿を現した。

その光に、彼は息を漏らすと共に目を見開き、彼女は心から安堵した。

二人を煌々と照らしつけるそれが、二人にとって実に数ヶ月ぶりの陽の光であったのだ。

「世界はまだ、こんなにも綺麗だよ」

「ああ……この景色を、伝えてやりたい」

彼は見開いた目を遠い空の彼方へと向け、瞳から大粒の涙を流しながら言った。

何も飾らず、意識することもなく漏れた、彼の本心からの言葉だった。

「そう、この光景だって伝える。私たちの言葉で、次の世代に」

彼女は優しく撫でるように言って、彼へと手を差し伸べた。それもまた、優しく撫でるように。

そしてその手は、何物をも凌駕する、彼にとっての唯一の救いであった。

差し伸べられた手を握り締める——その前に、彼は一つだけ問うた。

「それって、プロポーズなのか？」

微笑と共に向けられた言葉に、彼女もまた微笑と共に言った「その言葉だって、伝えてあげなくちゃね」

夕焼けに照り映える二つの手が、時を同じく前に出る。

互いの手を握り締め合った二人は、共に生きていくことを心に、魂に誓った。

希望を持ち、過去を語り伝え、未来を創ろうと。

「……まるで、アダムとイヴだ」

彼は言い、彼女は笑う。

二人で同じ光景を——生き抜いた末に辿り着く、輝かしい日々を夢に見ながら。